

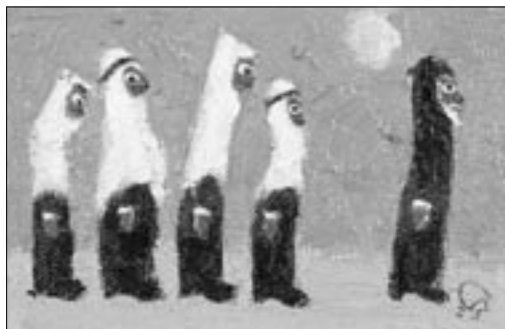
YA

2006
No.
20



これは世につたえておきたい
かたっておきたい
わが胸の底から真実のおもい
人生幾山河のめぐりあい
あの日の風やひかり そして空のひとひら
哀歎のかがり火に生きた幾年月の路
「自分史図書館」は その証言館です。

井口保 画集



58 祈りの旅(モロッコ) 10.0×15.0 1990年

○井口保画集

お便りに「八十年生きて来た証として何か残したいと思い、この度、画集を作る事に致しました。素人の拙い作品ですが、御世話になった皆様に御高覧頂き度くご笑納下さい」八十歳におなりといえ、大正12年、旧水田村でのお生まれ。旧満州での抑留体験、復員後上京、勉学の傍ら、溝江勘二画伯(大川出身)の薫陶もうけられる。帰郷後は内野秀美画伯に師事、以後、示現会展に出品しつづけられ、会員として精励されている。美術評論家谷口治達氏は「謙虚で温厚、清廉なお人柄が作品に静かに反映されている」と序文をしたためている。

画集をいただいて私も一点一点に見入って行ったが、徹底した描写力には感服のほかはない。しかし、P55の「祈りの旅(モロッコ)」に出会って、礼拝者たちのペンギンにも似た行列。なんとなくユーモラスな行列に思わず微笑した。画面が温いのだ。一番好きな絵として、この作品をここにかけることにした。

(椎窓)



在宅酸素 大坪公子
イラワジに小舟を浮かべし兵思ふ
十九万人この地に果てしと
イラワジの河を見おろす丘に建つ
鎮魂の碑は菊部隊のために
五月梅ほのかなる香を漂はせ
屋敷の席に笑みのあふるる
楠の木を守りし女人の話あり
肥前の女医はたのもしきかな
百歳の嬸は涙をうかべつ
往診のわれの手握り放さず
(東京都世田谷区三軒茶屋)



生かされて 奥本 守
風寒し遠くに除夜の鐘鳴りて
雪降るに桜の蕾ほころびて
うすくれないの枝揺れやまず
こっそりと国会議員のやることは
金の亡者ぞ善き顔をして
降り来たる激しき雨は帰り来し
つばめは子の側離れずにいる
螢火の飛び来てわれを離れざり
亡き子か母か姉かも知れず
(福井県若狭町下吉田)



楠若葉 金子米子
秋あかね群れる岡の草原に
石ひとつ立ち平家塚あり
取得なきこの一年も過ぎたりと
部屋にこもれば時雨ふる昔
わがことにかまけて日々の過ぎをれば
老いたる母が電話かけくる
高きより見れば名栗の村落は
杉山負ひて秋の日に照る
ひと月はまたたく間過ぎ母逝きて
立つ草原に秋の日淡し
(東京都大田区大森西)



○「鴉」の先生と
「山峡かぎんちよ草紙」

椎窓 猛

知る人ぞ知る——、
「鴉」のセンセイ、渡辺啓助先生は、日本探偵作家クラブ、(現日本推理作家協会)の第4代会長。『偽眼のマドンナ』発表注目され、のちに『オールドスの鷹』は直木賞候補作品に挙げられるなど、推理小説界では大御所的存在。

若い頃には、県立八女中学で教師を勤められ、伝記作家小島直記氏や作家中園英助氏らに大きな影響薫陶を与えられた。

晩年、心に残る黒い妖精の魅力を持つと、カラスの挙動に関心を寄せられ、鴉の絵と文章の組みあわせによるエッセイ画集などを出版されている。

ところで、1989年(平成元年)のころ、立風書房の富永弘志氏の推挙で、私の短篇に掌篇を集めて、作品集出版が企画された。そのゲラを東京目黒の喫茶店で、校正していたところ、コーヒーを運んできた

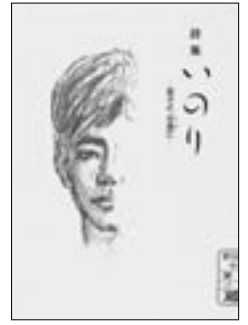
店のママさんが「これ八女の話みたいだねえ」、「そうです」「私の父は若い頃、八女の中学校に勤めていたらしいの。父に見せたらきっとよろこぶのじゃないかしら」そんな話から、ゲラは渡辺先生の膝もとにわたり、一読され、「面白い作品集」といわれ、題字は「ボクに書かせてもらえないか」という話になった。序文はすでに文芸評論家駒田信二先生、装幀は北九州のユニークなイラストライター山福康政さんとことは進んでいたなかで、題字のみを渡辺啓助先生におたのみすることになった。したがって、私は渡辺先生の孫弟子のような存在となった。先生は101歳の長寿で、2002年逝去された。先生の直接揮毫による作品集の題字はさして数多くあるまい。かかる意味においては私にとっては光栄な、もっとも貴重な稀覯本である。



○我流随想
どぶ板議員半生記

原 忠雄

読みながら、こんな議員さんの存在はいいな!「さあ、やるか、昼からやるぞ、もう5時だ」こんなことではいけない、先例慣習にとらわれず世のため、人のため」というのが議員センセイ。だが、人より我がため」についつい。原氏は地方議会は市民一人ひとりの声を行政に反映させるためには、自分自身を無にしてと述べられている。「常識は現状維持、妥協では進歩なし」の信念で議員活動。選挙区民ではなくとも、読んで声援したくなりました。



○詩集 いのり
吾子よ 永遠に

江島 政光

「生きることを信じて頑張った吾子哲司の姿をなんとか書きのこしておきたい」という父親の情愛によって綴られた長篇詩集である。

16年の若い生命が病魔に。昭和63年1月12日午後6時30分、おまえは私たちに永遠の別れを一。江島さんは詩人丸山豊先生を師と仰いだ時期もあったとみえ、序文を寄せられている。「この父子抒情を無益な修飾語なしに、真正面から語りかけたのがこの詩集です。大地をたたいて号泣する真裸の心の表現です」と、詩人は合掌されている。

編集掌記

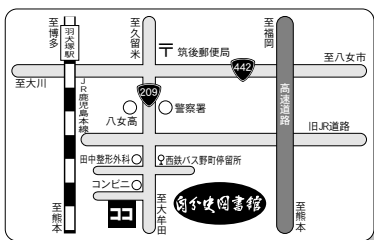
▼ご返事、お礼状をいたゞいて。▼とかく昨今の世情は自己本位、自己中心、用件依頼もそのとぎだけ、相手に思いやり、ありがたいといった、感謝の情念が稀薄になってきた傾向にあるだけに、「本」を書くひとは、やっぱりちがいますと声を大にして言

▼自分史図書館だより『YA』も創刊以来、20号に達した。ふりかえって、この紙面に紹介した本、その著者はいてない

蔵書目録③ができました ¥160 送料込(郵便切手可)

自分史図書館

入館無料
開館／午前9時～午後5時00分
休館／日曜、土曜日、祝祭日、年末・年始、その他休館することがあります。予めご確認下さい。
貸し出しはしていません。
インターネットでもご覧になれます。http://www.jibunshitosyokan



〒833-0032 筑後市野町423-8
TEL・FAX 0942-53-8122
西鉄バス野町停留所より徒歩5分

受贈図書紹介は今月休みます。



いたくなる。▼八女市の図書館でこのごろ感じたことだが、来館者への応待がまことに親切である。雑誌「山と溪谷」に、矢部村の高峰御前岳が全国チョンガリ山の九州代表に選ばれている記事、写真を見かけたので、コピーを依頼したところ、心よくコピーをとってくださった。一体に面倒くさがり屋にお役人タイプの多いなかで、心も温まります。(T.S)